



2022年10月18日 キリスト教センター通信 67号

「祈り」

理事長 司祭 バジル 八代 智

後期が始まって早や1か月が経とうとしています。リニューアルされた学食にたくさんの学生が出入りしている姿を見ていて、コロナ禍で閑散としていた大学キャンパスに活気が戻ってきたことを実感し嬉しく思います。

チャペルではこの2年間コロナで休校中の時も、毎日チャプレンによってコロナの祈りが続けられ、また2月24日ロシアによる軍事侵攻が開始されてからは「ウクライナのため」に毎日祈り続けています。このように本学はキリスト教の学校ということで、チャペル等で共に祈る機会も多いですが、学生の皆さんはこのような「祈り」についてどう思われますか？

キリスト教をはじめご家族皆さんと何らかの宗教団体に所属していたり、毎年お正月に初詣に行ったりする習慣がある学生にとっては、祈るという行為もそれほど珍しくないでしょうが、大半の日本人学生は無宗教の人が多いと思います。昔はここ日本のほとんどのご家庭にお仏壇があり、毎朝毎晩お仏壇に向かってチーンと鳴らしてお祈りするおじいちゃんやおばあちゃんの姿が、日常の暮らしの中で当たり前のようでありました。ところが、核家族化が進み、お父さんお母さんの世代になってから、大人たちが祈る姿を子供たちが見る機会もほとんどなくなってしまったのではないのでしょうか。そのような無宗教のご家庭で育った学生にとっては、「祈り」という行為そのものが不思議でならないかも知れません。

しかしながら、神様や仏様に祈る経験がなくても、すべての学生の皆さんはこれまで育ってきた中で、普通に「ありがとう」や「ごめんなさい」、「いただきます」に「ごちそうさま」といったことばを何度も口にしてきたことと思います。

私はこうした素直な心の感情から発せられることばもまた、立派な「祈り」だと思っています。さらには「明日お父さんが受ける手術が成功して、お父さんが元気になって早く退院できますように」といったような優しい願いの気持ちもまた、とても美しい「祈り」だと思っています。このように自分はだ無宗教と思っている人でも、それぞれの心の中に素直な祈りの感情が備わっているのだということを感じたいものです。

大学のチャペルでは午後1時から毎日礼拝が行われていますが、礼拝時間以外もチャペルは学生の皆さんに解放されていますので、悩み事があっても無くても、いつでもチャペルに入って自分自身を見つめるひと時を持つてくださればと願っています。



一口メモ 教会・寺院・大聖堂

日本ではいわゆる「お寺」が「寺院」、大きな「教会」が「大聖堂」と思いがちですが、キリスト教の聖職者や信徒の集団・組織が「教会」であり、規模にかかわらず建物自体を「教会」というわけではありません。大聖堂 Cathedral は主教・司教がいるところで、それ以外は Church 教会、お寺ではない寺院は Abbey、英国国教会は Westminster Abbey ウェストミンスター寺院で、ロンドン教区の主教座聖堂は St. Paul's Cathedral、カトリック教会の司教座聖堂が Westminster Cathedral です。

